様式第２号

平成２５年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２６年３月３１日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td colspan="2">保健福祉学科</td><td>職 名</td><td>教授</td><td>氏 名</td><td>村社　卓</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="7">高齢者の孤立予防に向けたソーシャルワークモデル開発</td></tr>
<tr><td>交付決定額</td><td colspan="7">40 万円</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td colspan="2">村社卓</td><td colspan="2">保健福祉学部　教授</td><td colspan="2">ソーシャルワーク論</td><td colspan="2">調査，データ分析</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="7">調査研究目的は，高齢者及びその介護者の孤立予防に向けたソーシャルワークモデルの開発である。本調査研究では，高齢者を対象とした孤立予防システムにおけるソーシャルワークモデル開発の予備作業を行った。具体的には，同モデル開発のために，大都市（東京都新宿区）において，高齢者及びその介護者の孤立予防を図る官民協働事業「ほっと安心地域ひろば（ほっと安心カフェ）」に着目し，事業に参加するボランティア活動の分析を行った。特に，孤立した高齢者に関与するうえで重要な位置にあるボランティアの共感疲労と共感満足を分析対象として，その構造とプロセスを明らかにした。

今回の研究成果は，以下の３点を明らかにしたことである。
①先行研究を踏まえた定性的（質的）研究の実施により，ボランティアにおける共感疲労と共感満足の構造とプロセスを明らかにした。被害者支援，児童虐待領域における共感疲労・共感満足に関する先行研究に基づき，ボランティア活動において参与観察及びインタビューを行い，データの収集と分析，理論化（モデル化）を行った。
②高齢者の孤立予防に向けたソーシャルワークモデルについて，特に支援の中心となるボランティアの特性を「共感の焦点化と分散」として明らかにした。ボランティアは，共感満足を得るためにその共感力を「焦点化」させること，一方共感疲労を防ぐためにその共感力を「分散」させていること，をそれぞれ構造的に明らかにした。
③以上の成果を踏まえ，今後のモデル開発に向けた課題を明らかにした。今回の「高齢者の孤立予防に関わるボランティアの共感力の焦点化と分散」を基盤に，①共感力のコーディネート，②共感力のコーディネートシステム，の研究を今後実施予定である。</td></tr>
</table>

調査研究実績の概要	前記の研究成果は，以下の８点として整理することができる。 先行研究の検討として，次の２点を実施した。 **①共感ストレスモデルと共感疲労モデルの関係について批判的に検討した。** 本研究では「共感疲労の過程」（Figlay 2001）を批判的に検討している。同過程は，共感疲労が，「共感能力→共感応答→共感ストレス→共感疲労（共感満足）」へと展開することを明かにしたものである。このプロセスについて，わが国における孤立した高齢者を対象としたボランティア活動の視点から批判的検討を行った。 **②共感疲労とバーンアウトの関係について批判的に検討した。** 対人援助者のバーンアウトは，共感疲労の結果生じるものである。バーンアウトの要因としては，個人要因（共感疲労）だけでなく環境要因（環境への不適応）が存在する。この構造について，わが国における孤立した高齢者を対象としたボランティア活動の視点から批判的検討を行った。 上記の先行研究を踏まえ，定性的（質的）研究を実施し，次の４点を明らかにした。このテーマにおける定性的（質的）研究の実施は，わが国において初の試みである。 **③高齢者を対象としたボランティア活動における共感疲労の構造を提示した。** 共感疲労にはトラウマ優位のものとストレス優位のものの２種類がある。共感疲労の要因としては，「過剰な感情移入」「長期間の曝露」に加えて，ボランティア本人による「無力感・罪悪感」があり，それは重要な要因となることが示唆された。 **④高齢者を対象としたボランティア活動における共感満足の構造を提示した。** 孤立した高齢者を対象としたボランティアの共感満足の要因には，従来の「感情表出」「自己援助」「資源活用」に加えて，「共感分散力」「社会貢献力」の２つの能力が加わることが示唆された。「社会貢献」は，自己成長，自己変革につながるものであり，ボランティアにおける共感疲労・共感満足の研究では重要な概念である。 **⑤共感疲労と共感満足の関係性を提示した。** 孤立した高齢者を対象としたボランティア活動において，ボランティアの共感疲労と共感満足はフィードバックを繰り返しながら獲得されていく。両者は密接な関係にあり、相互的であることが示唆された。 **⑥「共感分散」の構造を提示した。** 「共感分散」とは「時間的・空間的な間隔」の概念である。共感疲労・共感満足の研究において重要な概念となることが示唆された。「共感分散」の特性は，「役割の限定」「機会の増加」「中途半端」として表現することができる。 さらに，①－⑥の研究成果を踏まえて，次の２点を実施した。 **⑦ボランティア活動への提言を行った。** 論文のなかで，今回の成果である「高齢者の孤立予防に関わるボランティアの共感力の焦点化と分散」に基づき，孤立した高齢者に関わるボランティアに対して，「つなぐ」ことに代表される「役割の限定化」「支援の最適化」の実行について助言を行った。 **⑧来年度の科研費取得に向けて研究テーマの整理を行った。** 今後の研究題目を「高齢者の孤立予防に向けたボランティアの共感力に関する研究」「高齢者の孤立予防に向けたボランティアコーディネートに関する研究」「高齢者の孤立問題に対応した予防システム開発に関する基盤研究」として整理した。 なお，今回の研究成果は，平成26年度『社会福祉学（締切4月30日：査読誌）』『ソーシャルワーク学会誌（締切6月30日：査読誌）』の２誌に投稿予定である。また，『日本社会福祉学会（11月開催予定）』でも報告予定である。

成果資料目録	